

東京純心大学紀要

現代文化学部 第26号 (2022年3月) 抜刷

論文

1923年、児童雑誌『オリニ』創刊と朝鮮少年運動
— 方定煥の朝鮮の子ども認識と「オリニ賛美」—

大 竹 聖 美

A Study of the Korean Modern Children's Magazine
“Eorini” and the Korean Modern Children's Movement
—Bang Jeong-hwan's Recognition of Korean Children and
“Praise of Eorini”—

OTAKE Kiyomi

論文

1923年、児童雑誌『オリニ』創刊と朝鮮少年運動
— 方定煥の朝鮮の子ども認識と「オリニ賛美」—
A Study of the Korean Modern Children's Magazine
“Eorini” and the Korean Modern Children's Movement
—Bang Jeong-hwan's Recognition of Korean Children and
“Praise of Eorini”—

大竹聖美

Bang Jeong-hwan played an important role in the publication of the important magazines “Gaebyok,” “Eorini,” and “New Women” in 1920s Korea. Especially in “Eorini” and “New Women”, he was responsible for editing magazines and wrote many articles. These magazines are positioned as important publications in the modern history of Korea because they enlightened Korean society. In this paper, I read the texts of Bang Jeong-hwan published in those magazines and examined his view of children. As symbolically expressed in his text “Children's Praise,” Bang Jeong-hwan's view of children is consistent with the concept of Cheondoism, which was an important religion in modern Korea. At the same time, it also had the character of the children's movement, which originated from the history of Cheondoism systematically expanding nationwide.

キーワード：近代児童文化／韓国児童文学／方定煥／オリニ／朝鮮

1. はじめに

1923年は、韓国児童文学の成立期を考察するうえでもっとも注目すべき年である。朝鮮初の本格的な近代児童文芸誌として多くの童話・童謡・童話劇を生み出した『オリニ (어린이)』が創刊された年だからである。本誌の刊行は、韓国近代児童文学の開拓者で、先駆的人権運動家として現在韓国で評価されている方定煥 (パン・ジョンファン/방정환, 1899年11月9日～1931年7月23日) による。『オリニ』は、現在も韓国で愛される創作童話や童謡を生み出したばかりでなく、世界名作童話の紹介、朝鮮伝来童話の発掘、歴史物語、紀行文、笑い話のほか、懸賞問題や算数問題、科学知識など広く朝鮮の子どもたちに楽しみと教養を与えた総合的

な児童文化誌でもあった。

「オリニ」は朝鮮語で「子ども」を意味し、ハングルで表記される純粋韓国語である。儒教規範が強い伝統的な朝鮮社会では尊重されなかった子ども＝幼い人たちの価値を認めた「オリニ」という新しい言葉を幼い人たちへの尊称として使った方定煥には確固とした思想的背景があった。それは朝鮮の民族宗教である天道教である。方定煥は、1917年に天道教第三代教主孫秉熙の三女溶嬪と結婚し、その後も天道教で重要なポジションについていた。

韓国児童文学の成立期を解明するには、その中心で多方面の仕事をした方定煥の思想と活動を研究する必要がある、筆者は以下のように一連の方定煥研究を行っている。

- ① 【1899～1910年：幼少期】生家と貧困
「方定煥研究～誕生から10歳まで・幼少期の生家と時代背景：評伝『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』を読む～」(東京純心女子大学『紀要』第18号、2014年3月)
- ② 【1910～1918年：10代の方定煥】学校・職業・天道教・結婚
「方定煥と天道教——孫秉熙の三女との結婚まで～評伝『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』を読む～」(東京純心女子大学『紀要』第19号、2015年3月)
- ③ 【1919年：20歳の方定煥】三・一独立運動
「1919年前後の方定煥——<小波(ソパ)>の由来と三・一独立運動」、東京純心大学『紀要』現代文化学部、第20号、2016年3月
- ④ 【1920年：新文化運動】『開闢』での活躍
「新文化運動と方定煥——李相琴『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』に見る天道教青年会発足と『開闢』創刊」東京純心大学『紀要』現代文化学部、第21号、2017年3月
- ⑤ 【1920年9月～1921年】東京留学
「方定煥の東京留学——李相琴『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』を読む」東京純心大学『紀要』現代文化学部、第22号、2018年3月
「韓国児童文学成立期の探究と1921年前後の方定煥の足跡—伝記的考察と史跡踏査を中心に」東京純心大学『紀要』現代文化学部、第25号、2021年3月

本稿では、天道教を背景とする当時の代表的総合雑誌『開闢』の特派員として東京に滞在した方定煥が1923年に刊行した『オリニ』を読みながら、そこに掲載された作品や方定煥自身が書いた朝鮮の子どもたちの現状に関する文章を考察し、韓国児童文学の出発点とされる『オリ

ニ』の性格と方定煥の思想を確認する。

2. 韓国児童文学の出発点、『オリニ』の創刊

『オリニ』の創刊号は、1923年3月20日の刊行である。本来ならば、三・一独立運動(1919年3月1日)にちなんで、3月1日を予定していたようだ。しかし、創刊号第一頁からすでに「九行削除」の文字が見えるように、朝鮮総督府による検閲を受けなければならないことから、予定していた刊行日を過ぎてしまっている。

創刊号は、タブロイド判新聞紙の形態をとっている。表紙がついて雑誌の形態になったことが確認できるのは、6か月後の9月15日に刊行された第1巻第8号からだ。創刊号はタイトル面合わせて12頁に加えて広告ページが2頁巻末についていた。



図1 『オリニ』創刊号(京城、開闢社、1923年3月20日)

価格は五銭、第一巻第一号、大正十二年三月二十日発行と漢字で記載されている。毎月二回、一日十五日とも記されているが、毎月2巻刊行するのは並大抵のことではなかっただろう。総督府による検閲も受けなくてはならなかった。そのため刊行初年の1923年は12月までに11冊が刊行されただけだ¹。

『オリニ』創刊号には次のような創刊の辞が提示されている。

はじめに

鳥のように花のようにユスラウメのように小さい昏で、天真爛漫に歌う歌、それはそのまま自然の声であり、そのままハンウルの声であります。

鳩のように兎のように柔らかな髪を風になびかせながら飛び跳ね遊ぶ姿、そのまま自然の姿でありそのままハンウルの影なのです。そこには大人たちのような慾心もなければ下心もないのです。

罪悪がなく欠点のない平和で自由なハンウルの国！それは私たちのオリニの国です。私たちはいつまでもこのハンウルの国を穢してはならないしこの世に暮らすすべての人々が、この清らかな国に住めるように私たちの国を広げていかななくてはなりません。

この二つの仕事への想いから溢れ出るすべての清らかなものを集めたものが『オリニ』なのです。

私たちの熱い真心でできたこの『オリニ』が皆さんの温かい胸に抱かれるとき、そこに清らかな霊の芽が新しく芽吹くことを私たちは信じます。

(以上、拙訳) (『オリニ』創刊号、京城、開闢社、1923年3月20日、巻頭頁)

この創刊の辞からは、方定煥の子ども観と、彼が朝鮮の子どもたちに向けて雑誌『オリニ』を刊行した目的を読み取ることができる。

方定煥は子どもたちが歌う姿を、「鳥のように花のようにユスラウメのように小さい昏で、天真爛漫に歌う歌、それはそのまま自然の声であり、そのままハンウルの声」だと述べ、子どもたちの飛び跳ね遊ぶ姿を「鳩のように兎のように柔らかな髪を風になびかせながら飛び跳ね遊ぶ姿、そのまま自然の姿でありそのままハンウルの影」であると述べている。つまり、

子どもを鳥や兎に例えながら、子どもは自然そのものであり、それは「ハンウルである」と述べているのである。

この「ハンウル」とは、天道教の信仰対象のことで、原文では「한울(ハンウル)」と書かれている。朝鮮語で、神様のことを天主教(カトリック)は<하느님(ハヌニム)>と呼び、改新教(プロテスタント)では<하나님(ハナニム)>と呼び、空や天空のことを<하늘(ハヌル)>と言うが、すべて語頭の한(ハン)まで音声的に一致しており、ちなみに大韓民国(대한민국)の한(ハン)やハングル(한글)の한(ハン)も同じである。

天道教では、そうした神や天と類似した概念として<한울님(ハンウルニム)>を信仰対象としている。しかし、キリスト教などと大きく違うところは、超越した神の概念ではなく、私たち人間やそのほか宇宙万物すべてに<한울님(ハンウルニム)>が内在していると信じる点である。<人乃天(人はすなわち天である)>が天道教の思想である。

つまり、方定煥は、『オリニ』の創刊の辞において、子どもにも<한울님(ハンウルニム)>が内在しているし、むしろ、欲や計略がない分、大人よりもハンウルニム(天)に近い存在であると述べている。

そして、「罪悪がなく欠点のない平和で自由なハンウルの国！それは私たちのオリニの国です。」として、子どもたちの精神世界を「オリニの国」と呼びながら、平和で自由な天の国であると理想化している。さらに「私たちはいつまでもこのハンウルの国を穢してはならないしこの世に暮らすすべての人々が、この清らかな国に住めるように私たちの国を広げていかななくてはなりません。」と決意表明している。このように、『オリニ』の創刊の辞は、天道教の理想とするハンウルニム(天)の国を拡大することを目的とした、天道教少年会の児童文化運動としての要素を多分に含んだ創刊の辞となっているのである。

3. 方定煥が執筆した『オリニ』掲載記事と作品内容

方定煥は、『オリニ』創刊号に創刊の辞を書いただけでなく、世界名作童話や朝鮮伝来童話を執筆している。巻頭頁をめくった最初の作品は、「名作童話」 「マッチ売りの少女」である。2～3頁にわたって見開きでアンデルセンの翻案童話が掲載された。イラスト付きで「丁抹アンデルセン氏作」と明記され、小波(ソパ/소파)の筆名で書かれた。

本作に関しては、方定煥が翻案した底本は特定されていないが、イラストについては、1920年5月に刊行された『金の船』81頁の齋藤佐次郎「王子と燕」の挿絵が転載されている(図2、図3参照)。方定煥と『金の船』の関係については、すでに研究されている¹⁾ため本稿では論じないが、この「王子と燕」は、1922年7月に開闢社から刊行された『愛の贈り物(사랑의 선물)』に収録された「왕자와 재비(王子と燕)」の底本でもある。

方定煥は創刊の辞で、「すべての清らかなものを集めたものが『オリニ』なのです。」と述べていたが、巻頭頁の次に目立つページにマッチ売りの少女を掲載しているということは、方定煥が「清らかなもの」として真っ先に選んだも

のが、アンデルセンのマッチ売りの少女だったということの意味しているのではないだろうか。

次に、6～7頁には、やはり見開きで「学校、少年会などで演じやすい童話劇」 「童話劇 ノレチュモニ(歌の袋)」が掲載された。日本の「瘤取り爺」と同類型の朝鮮の伝来童話を方定煥が児童劇の脚本のスタイルで書いたものだ。これは1923年4月1日に発行された第一巻第二号の6～8頁にも続きが掲載された。

さらに8頁めは、3月に咲く花の伝説として「ヒヤシンス物語」、9～10頁は、「フランス童話 悪戯なお化け」が掲載されたが、これらもすべて方定煥の執筆である。「名作童話 マッチ売りの少女」の執筆者は「小波(ソパ)」。「童話劇 ノレチュモニ(歌の袋)」は「소파(ソパ)」。「ヒヤシンス物語」は「스승(チウウヒウッセン)」。「フランス童話」は「몽中人(モンチュンイン)」と、それぞれ執筆者が異なるように見えるが、実はすべて方定煥の筆名である。12頁中7頁という半分を超える紙数を方定煥がいくつもの筆名を使い分けて執筆していたのである²⁾。

そのほかの誌面には、「各地方の少年会消息」「童謡」「面白い懸賞問題」などのコラムの他、世界の子どもたちの生活を紹介する「世界少



図2 『金の船』第2巻第5号、キンノツノ社、1920年5月、81頁、齋藤佐次郎「王子と燕」挿絵



図3 『オリニ』第1巻第1号、京城、開闢社、1923年3月20日、3頁、小波「名作童話 丁抹アンデルセン氏作 マッチ売りの少女」挿絵

年」、様々なニュースを伝える「新しい消息」、編集後記に該当する「残されたインク」、投稿原稿(感想文、手紙、日記、童謡など)募集記事、次号予告、謝告等が掲載されているが、いずれも執筆者名が書かれていないため誰の執筆なのかは不明である。ただし、記名のない編集後記「残されたインク」は方定煥の執筆として韓国で公認されている。その他の記事も、後述する李定鎬の文章以外はほぼ方定煥の筆によるものと韓国の児童文学研究者の間では把握されている³⁾。

4. 少年運動の一環としての『オリニ』刊行

『オリニ』は、世界名作や童話劇、童謡など「清らかなもの」を掲載したことから、朝鮮初の本格的児童文芸雑誌と評されているが、一方では、「各地の少年会消息」や「世界少年」などの情報伝達にも誌面を割き、世界各地の子どもの生活や活動を積極的に伝えている。これは、『オリニ』が少年運動と連帯していたことの証左であるとともに、韓国児童文学の出発点は少年運動とともにあったことを示していると言える。

1923年刊行の児童文芸誌として、日本の大正時代の多様な童話雑誌や童心主義の文芸思潮と比較されることの多い『オリニ』であるが、日本における大正期の児童文芸誌流行とは背景が大きく異なることをしっかりと認識しておく必要がある。

そもそも、『オリニ』の出版元の開闢社は、独立運動を主導した天道教による出版社であり、主幹する方定煥は、天道教の重要なポジションにあった天道教人であり、確固とした天道教の信仰、つまり<人乃天(人はすなわち天である。信仰対象は万物に内在されている)>という思想を持って『オリニ』を刊行し、少年運動と連帯しながら民族の独立と子どもの尊厳を守ろうとした。

『オリニ』の少年運動的側面は、創刊号巻頭頁の下半分を使って書かれた『『オリニ』を發行する今日まで 私たちはこのように過しまし

た』という文章からも明白である。少年運動は独立運動につながるためであろうか、文中には朝鮮総督府による検閲の結果と思われる「……(以下九行削除)……」という表記もある。李定鎬⁴⁾による執筆で、末尾に(未完)とあるが、以下のようだ。

『『オリニ』を發行する今日まで 私たちはこのように過りました』

○書房や講習所や主日学校ではなく、社会的会合の性質を帯びた少年会が私たちの朝鮮に生まれたのは慶尚南道晋州で組織された晋州少年会が初めてのものでした。……(以下九行削除)……一昨年の春、五月初旬にソウルで新しく産声を上げたのが天道教少年会で、私たちの幼い同志男女合わせて三十余名が集まった朝鮮少年運動の初の鼓動でした。第一番目に、我々は、「たくましい少年になりましょう。そして、つねに互いを愛し、助け合いましょう」と固く約束し、そしてこのことを私たち皆の信条としました。そして、良い意見をもらい、成し遂げていく仕事の議論をするために、毎週木曜日と日曜日に集まることにしました。○そして、まずはじめに私たちを指導される力のある後援者金起瀟⁵⁾氏と方定煥を得ました。二人は誰よりも第一に私たちを理解してくれ、常に私たちを愛してくれ、私たちのためにどうにかしてできない場合はいつも不憚におもってくれます。

○私たちは本当に実の兄のように実の父母のように信じてついていくことにしました。事実、少年問題に関しては研究をよくなさっている二人の先生を得たことは私たちの運動にとって最も大きな力でした。(李定鎬) (未完)

(以上、拙訳) (『オリニ』創刊号、京城、開闢社、1923年3月20日、巻頭頁、下半分二段にわたって掲載。真ん中には「アハハハハハハ」と笑う少女の写真。図1参照)

5. 朝鮮の子どもたちの現状に対する方定煥の認識

方定煥が、当時の朝鮮の子どもたちをどのように認識していたのが良く分かる文章がある。1924年『オリニ』12月号38～39頁に掲載された『『オリニ』の仲間たちへ』だ。編集人と記されているが、方定煥のことである。以下、全文訳出する。下線は筆者が付し、訳文掲載後に下線部分について考察した。

実際の誌面は図4参照。朝鮮総督府の検閲により途中28行削除されたことが分かる。右頁の下段は空白のままで刊行されている。

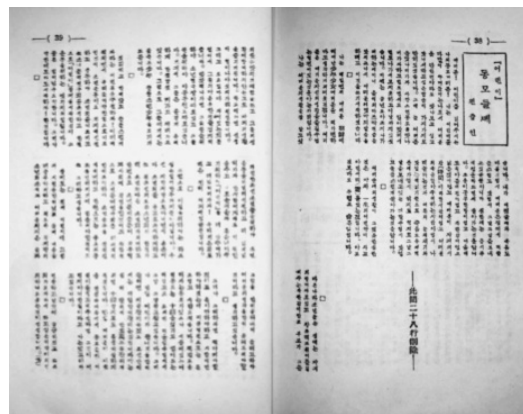


図4 『『オリニ』の仲間たちへ』1924年『オリニ』12月号38～39頁。朝鮮総督府の検閲により、右下部分を28行削除されている。

『オリニ』の仲間たちへ
編集人

皆さん！オリニを読んで下さる私の仲間の皆さん！私はオリニを毎月編集している者として皆さんにたった一度でもお会いしてみたいですし、お会いしてお話したいことが色々たくさんあります。そう、いつも皆さんに会いに行こう、愛らしい皆さんに会いに行こうと言いながら、仕事が忙しくてあまり出かけることもできず今日までおりました。もう、今年も終わろうとしているので、今年の最後の編集を終えて皆さんにいくつかのお話をしようと考えて書

き始めました。

□

私は一番最初に、あなた方朝鮮に生まれた少年少女の皆さんがたいへん憐れに思えて耐えられません。皆さんは、皆さん自身の生活が楽しめない状況にあることを知っているわけです。

私は皆さんの生活をよく知っています。私が幼い頃と少しも変わるところがなく、皆さんは家で、とてもつまらなく、味気なく、その日その日を過ごしているだけでなく、ひどい時には、冷遇されながら生きていることを知っています。静かに勉強できる部屋がないし、好きに遊べる場所もないし、おもちゃもないし、読むものもないし、皆さんが自分の時間だといえる時間もない。皆さんの気持ちを分かろうとしてくれる人がないまま自分を押しさえ、大人の顔色を窺い、面白くない本を読むだけで少しも愉快に感じる時もなく、無理やりその日その日を過ごしている、この上なく味気なくつまらなく暮らしているのを知っています。

□

幼い時の生活がこのようにひどいのは、あたかも一生の新芽が冷たくヒリヒリする霜にあたるようなものです。なによりも恐ろしく、悲しいことです。

—此間二十八行削除—

□

他の国の少年たちは、家に自分の部屋が別途あって、創造力と趣味を育てるおもちゃが多く、父母は彼らの意思をくみ取ることにより力を注ぎ、彼らの生活を邪魔しないように自分たちの生活を楽めます。学校に行けば、先生はお兄さんや叔父さんのように親切です。そして、土曜日ごとに面白い会を催し彼らの心を思い切り楽しませてくれます。外に出れば、彼らだけのため

の児童公園もあります。そこで彼らは楽しく愉快に思い切り心から大きくなり伸びていっています。そのため、彼らにはしょぼくれた少年、つまらなそうな少年を見ることはあまりありません。

□

踏みにじられて虐待を受けてつまらなそうに育つ幼い魂を救おう！こう叫びながら、私たちが弱い力で起こしたのが少年運動であり、各地に宣伝して働きかけ少年会を起し、また少年問題研究会を組織し、一方で『オリニ』誌を始めたことがその運動のためのいくつかの仕事です。もちろん力はとても弱いですが、しかし、弱かろうが始めましょう！ということです。

□

憐れな朝鮮の少年たちのために少年運動をもっと遠くまで宣伝し、もっと広く広げていきましょう。一人のためにでももっと慰安を与え、新しい気運と魂を入れてあげるために『オリニ』をもっとよくしてもっと広げていきましょう！私たちのすべての努力は全くここにあるのみです。

□

そのため、このことのためにやりたいことが一つ二つではありません。まず、各地方を回りながら、村々に少年会を組織しながら、全朝鮮のすべての少年会が皆一斉に少年会らしい少年会になるようにし、一方では、少年問題を取り上げて各父兄と社会に講演をすることであり、もう一方では、少年問題研究会をもっと大きくもっとたくさん組織して少年運動をよく進展させながら、一方では童謡と童話を広く広げるために力を尽くさなければならぬし、また、そうしたいです。

□

雑誌としては、まず、絵と写真をたくさん載せ、次に、内容を豊富にして、なるべく各地方の少年会消息と皆さんが書いた文

章と絵をたくさん選んで載せ、皆さんの考えをたくさん助けなくてはならないだろうと考えています。

□

しかし、そうしようとする雑誌は大きくなくてはならず、お金も必要、人手も多くななくてはならないのですが、現在の状況では、お金もないし、人手も少ないです。雑誌の値段もあげましょうと言う仲間がいるけれども、田舎にいる幼い仲間は十銭を得ることも大変なことなのだから、とても値上げをするわけにはいかず、ただ、耐えているのです。しかし、万一『オリニ』が良く売れたら、今売れているのも朝鮮の中では最もよく売れているのですが、もうちょっとよく売れて約五万部くらい売れたら十銭の雑誌としても立派によくやれることでしょう。万一皆さんがこの志をよく汲みとってくださり、仲間たちに『オリニ』を勧めてくださるのなら、それは難しいことではないと私は信じ願っています。

□

編集した終わりに急いで書いたもので、また紙が足りず話したいことの千のうち一つも書けなかったことは残念です。(方) (以上、拙訳) (下線は筆者) (『オリニ』京城、開闢社、1924年12月号38～39頁)

方定煥は、「朝鮮に生まれた少年少女の皆さんがたいへん憐れに思えて耐えられません。」とはっきりと言う。方定煥は、500年続いた朝鮮王朝が終焉し、日清戦争に日本が勝利してこれまでの世界観が大きく転換する混乱期にあった旧韓末の1899年に生まれているが、そうした「私が幼い頃と少しも変わるところがなく、皆さんは家で、とてもつまらなく、味気なく、その日その日を過ごしている」と嘆いている。1920年代の植民地朝鮮の子どもたちの生活は、前近代的な旧韓末期と変わらなかったということだ。

そして、「幼い時の生活がこのようにひどいのは、あたかも一生の新芽が冷たくヒリヒリする霜にあたるようなものです。なによりも恐ろしく、悲しいことです。」と述べた。これがまさに方定煥の朝鮮の現状評価であり、人権感覚である。

この文章では、こうした子どもの生育環境への批判に続く部分が28行削除されているため、さらにどのようなことが言及されたのか知ることができない。しかし、その直後の段落で、「他の国の少年たちは、家に自分の部屋が別途あって、創造力と趣味を育てるおもちゃが多く、父母は彼らの意思をくみ取ることにより力を注ぎ、彼らの生活を邪魔しないように自分たちの生活を楽します。」と述べられており、この部分から方定煥の考える理想的な子どもの生活を知ることができる。

ここで言われている「他の国」というのは、欧米のことだろうか。すでに世界名作童話をいくつも紹介している方定煥であるから、欧米の文芸作品や啓蒙書などを通して近代的な児童中心主義の思想や生活様式への見識は持っているに違いない。

しかし、これに続く記述を見ると、やはり1920年～23年にかけて滞在した東京での見聞に基づいた見解であると解釈せざるを得ない。すなわち、「学校に行けば、先生はお兄さんや叔父さんのように親切です。そして、土曜日ごとに面白い会を催し彼らの心を思い切り楽しませてくれます。外に出れば、彼らだけのための児童公園もあります。そこで彼らは楽しく愉快に思い切り心から大きくなり伸びていきます。そのため、彼らにはしょぼくれた少年、つまらなそうな少年を見ることはあまりありません。」という部分である。1920年代の東京は、いわゆる大正自由教育運動の時代であり、新教育が隆盛していた頃である。朝鮮の伝統的な儒教式人間関係、上下関係の規範からみるとその教員像は親しげに見えたに違いない。また、1908年には児童専用の公園として御茶ノ水公

園（現宮本公園）が開園していたし、方定煥が東京滞在中の1922年には日比谷公園内の児童遊園で遊戯指導なども行われていた^{vii}。

これらの記述からは、方定煥が東京滞在中に何を見て、何に感動し、何が朝鮮に不足していると感じたのかを読み取ることができる。

1920年代の東京の児童文化を実際に見た方定煥は、朝鮮の子どもたちの現状に対して「踏みにじられて虐待を受けてつまらなそうに育つ幼い魂を救おう！」と叫んでいる。そのため始めたのが少年会活動であり、『オリニ』の刊行であり、これらをすべて含めて少年運動と言っているのである。

全国的に少年運動を広げ、『オリニ』を広げ、各地の少年会組織を確立させようと呼びかけた方定煥であるが、こうした活動からは、方定煥が所属する天道教と、その前身の東学の歴史的な発展方法と同様の組織論が浮かび上がってくる。つまり、農民の抵抗運動を朝鮮全土に拡大していった東学の組織的動きと類似しているのである。そして、そうした運動の目的も同様に抑圧からの解放である。このことから、幼い魂を救う少年運動は、一種の独立運動であったといえる。実際に『オリニ』には、各地の少年会消息が毎回掲載されていた。

6. 方定煥の「オリニ賛美」

韓国児童文学の出発点と見なされ、朝鮮における本格的児童文芸誌の嚆矢として韓国の近代史に名を残す『オリニ』であるが、ここまで見てきたように、児童雑誌『オリニ』は多分に各地の少年運動を組織化する少年会の会報の性格を持ち備えており、方定煥が童話や童謡の創作を推奨し、世界の名作童話の翻案作品を次々と紹介していったのも、朝鮮の子どもたちの育つ環境を民族の未来に向けて開拓しようとする児童文化運動としての性格が強かった。

その精神は、方定煥が『オリニ』創刊に先立って指導した天道教少年会の「たくましい少年になりましょう。そして、つねに互いを愛

し、助け合いましょう」というモットーからも理解することができる。

しかし、ここで注意すべきことは、やはり、『オリニ』の出版元は天道教を背景とする開闢社であり、方定煥の少年運動の出発点も天道教の少年会である点である。方定煥の児童観の根幹には、天道教の<人及天>思想があり、子どもに内在するハンウルニム（天）への信仰があることを忘れてはならない。この方定煥の天道教の信仰に基づく子ども観を示している重要な資料があるので全文訳出する。

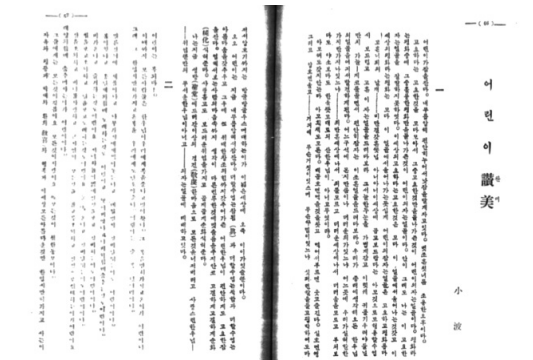


図5 小波「オリニ賛美」、『新女性』通巻6号、京城、開闢社、1924年6月、66～71頁

オリニ賛美
小波

オリニが眠る。私の膝の前で穏やかに昼寝をしている。稲も青く美しい初夏の静かな午後だ。

静寂という静寂を集め、その中でも真に静寂なものだけを選び出したものがオリニの寝顔だ。平和という平和の中で、優れた平和だけを選び出したものがオリニの寝顔だ。いやしかし、私は、この静かな寝顔をうまく言い表せられない。この世の静寂という静寂のすべてを集めたものがこの寝顔からにじみ出てくるようであり、この世の平和という平和はすべてこの寝顔からにじみ出てくるかのように、オリニの寝顔は静

かで平和だ。

美しい蝶の翅…………絹のような、いやいや、この世の美しく滑らかなどんなものにも形容しがたい、滑らかで美しいこの寝顔をご覧ください。この涼しげな二つの目を軽く閉じ、このように耳を澄ましてようやく聞こえるほどの細い寝息をたててすやすやと眠るこの良い寝顔を見よ。我々が従来考えてきたハンウルニムの顔をここに発見できる。どこにチリほどの穢れがあろうか。どこに我々大人ができるようなことが少しでもあるだろうか。……罪多きこの世に罪を知らず、穢れたこの世の穢れを知らず、仏よりもキリストよりもハンウルニムそのものである生きたハンウルニムでなくて何であるというのだ。

何も持たず、何の企てもない。お腹が空けば食べるものを探し、食べてお腹が膨れれば、笑い楽しむ。嫌ならむずかり、痛ければ泣き…………ここに何の偽りがあり、何の飾りがあるのか。研ぎ澄ました刀をもって迫っても、切られて痛くなるまでにここにこと笑っていられるのは、この広い世の中で、ただオリニだけだ。

おお、オリニは今、私の膝の前で眠っている。これ以上ない真なるものと、これ以上ない善良さと、これ以上ない美しさを持ち、その上にさらに偉大な創造の力までを得た幼いハンウルニムが、すやすやと静かに眠る。横で見る人の心の中まで、他の煩惱な部分に合わせる隙を与えず、高潔に高潔に純化してくれる。愛らしくも滑らかな威厳を持ちながら美しく美しく純化してくれる。

私は今、聖堂にある理想の敬虔な心ですべてを忘れ、愛らしいハンウルニム——威厳だけの恐ろしいハンウルニムではなく——の寝顔に礼拝をささげている。

二
オリニは福だ！

これまですべての人々はハンウルニムが私たちに福をくれると信じてきた。その福をたくさん持ってきた人がオリニだ。そうだ、限りなくたくさん持ってきた福を我々にも分けてくれる。オリニは純福の塊だ。

枯れた芝生に若草が生え、木の枝に新芽が芽吹くと、真っ先によるこび飛び跳ねるのもオリニだ。

春が来たときとばかりと一緒に歌うのもオリニで、花が咲いたと蝶と一緒に踊りを踊るのもオリニだ。

雨が降ってきたとあって楽しむのもオリニで、夕焼けを見てよろこぶのもオリニだ。

星を見てよろこび、月を見て歌うのもオリニで、雪が降るといってよろこび飛び跳ねるのもオリニだ。

山を好み、海を愛し、大自然のすべてをひとつ残らず好み、心から親しむのがオリニで、太陽とともに踊りながら暮らす人がオリニだ。

彼らにはすべてがよろこびです。すべてが愛です。すべてが親しいきょうだいです。

自由と平等と博愛と歓喜と幸せと、この世のすべての美しいものだけを限りなくたくさん持って生きるのがオリニだ。オリニの生活、それそのものがハンウル意志である。私たちに与えられたハンウル啓示である。

オリニの生活に親近感が持てる人。オリニの生活をしばしば見守ることができる人——学ぶことができる人——はそれだけ幸せを深めることができるだろう。

三

オリニと顔を合わせると、私たちはしかめっ面、怒った顔、悲しい顔をすることはできない。どんなに気性が荒い人でも、オリニと顔を合わせれば、険悪な顔つきをするわけにはいかないだろう。オリニと向き合って——少なくとも、その少しの間は——知らないうちに、心の洗礼を受け、普段

は見られない微笑を漂わせた柔らかな良い顔つきになる。つかの間とはいえ、その間温純化される。清められる。どうであっても、我々はその純化される時間というものをしょっちゅう持ちたくなる。

一日も三千の心！（一日三千心）穢れた世の中で、私たちの清く善良な心をどれだけ簡単に曲げようとするのか。しかし、時には銀の鈴を振りながら、真なるものはあるのだと目覚めさせ、指示してくれるオリニの声と行動は、私たちに大きな救済の道になる。

私たちが疲れた体で仕事に絶望し、ひれ伏すときに、闇に光る光明の筋、私たちの胸に一筋の光を投げて新しい元氣と慰安を与えるのも、オリニだけがくれる尊い力だ。

オリニは悲しみを知らない。憂いがない。そして陰鬱なものを嫌う。いつ見ても愉快地気楽に遊ぶ。どこをつついても、限りない喜びと幸せがあふれ出る。喜びのうちに生き、喜びのうちに遊び、喜びのうちに成長する。抜け出す力、飛び回り遊ぶ生命の力、それがオリニだ。人類の進化と向上もここにあるのである。

オリニから喜びを奪い、オリニの顔に悲しみの涙を流させる人がいたとすれば、それよりもっと不幸な人はいないだろう。それよりもっと大きな罪人はいないだろう。この意味で、朝鮮人のように不幸で大きな罪人はいないだろう。

オリニの喜びを傷つけてはいけない！オリニの顔に悲しみの涙を流させてはいけない。そうする権利も、資格もないのに……無知な朝鮮の人たちは、どうしてたくさんオリニたちの顔に悲しみの涙を流させてきたのだろうか。

オリニたちの喜びを探してやらなければならない。オリニたちの喜びを探してやらなければならない。

四

オリニは、次の三つの世界ですべてのものを美化してしまう。

1、お話の世界 2、歌の世界 3、絵の世界

オリニの国の三つの優れた芸術である。

オリニたちは、いくら厳格な現実でもそれを一つの物語と見る。そのため平凡なこともオリニの世界ではそれが芸術化され燦爛たる美と興味を加え、オリニの頭の中に再び展開される。

そう、いつもこの世の全てを美しく見るのである。

オリニたちはまた、実際には経験できなかったことを物語の世界で見事に経験する。母や祖母の膝に座って、面白いお話を聞く時、オリニはお話しに同化してしまい、お話しの世界の中に入って、お話しに出てくるすべてのことを経験する。そうすると彼は立派にこのお話の世界で王子にもなり、孤児にもなり、あるいは蝶になり鳥にもなる。そうすることでオリニたちは自身が持つ幸せをさらに広げ、喜びをさらに広げていくのだ。

オリニは皆すべて詩人だ。見たもの感じたものをそのまま歌う詩人だ。美しい心を持ち、愛らしい瞳を持ち、美しく見て感じたそのものが、美しい言葉で文字で出てくるとき、出てくるすべてが詩になり、歌になる。夏の日、生い茂った樹々が風に揺れるのを見て、「風のお母さんが息子を送って木を揺らす」というのも、そのまま詩である。五色が燦爛と輝く虹を見て、「ハンウルニムの娘が登ったり下りたりする橋だ」というのもそのまま詩である。

夜の明るい月に黒い点を見ては

あのあの あの月の中に
月の桂が 生えたから
金の斧で 切りつけて
玉の斧で 整えて

わらぶきの 家を建てて

……………

美しい声高らかに、こうして歌を歌う。明るいお月様の桂樹の木を金の斧玉の斧で切って整え、藁葺きの三間の家を建てようという考えがなんとも美しく麗しい生活の所持者ではなからうか。

鳥よ鳥よ 青い鳥よ。
緑豆が残るように 抱かないで
緑豆の花が 散ってしまったら
チョンポ商人が 泣いていく(チョンポは緑豆ムク)

このような美しい歌を嬉しくて軽やかな心で声高らかに歌うときに、彼らの麗しい魂が、どのように美しく成長していくのだろうか。上の二つの歌(童謡)は、オリニ自身の中から湧き出たものではなく、大人が作ったものなのかもしれない。しかし、何年も何十年の間、オリニの国で歌われ、オリニのものになったものだから、その歌にしみ込んだオリニの考え、オリニの生活、オリニの魂を見ることができるのである。

ああ美しくも麗しい人よ。鶯のような自然詩人よ、彼がオリニだ。

オリニは絵を好む。そして描くことを好む。わずかな技巧も無い純真な芸術を生む。大人のサントゥを面白そうに見るとき、オリニはからだよりも大きいサントゥを描く。巡査の刀をおかしなものだと見るとき、オリニは巡査よりも大きな刀を描く。いかにも正直な表現ではないか。いかにも純真な芸術ではないか。昨年の夏のことである。ソウルの天道教堂の中で6歳のオリニ(男子)にこの家(教堂内部全体を指さしながら)を描いてみなさいと言ったことがあった。オリニはためらわずに紙と

筆を受け取って、はばかりことなく真四角を一つでかどと描いて、私に突き出した。全く驚くべきことだ。この幼いオリニが、大きな家に入って座り、この家を見るには大きく、真四角な広い家としか見えず、別に複雑に見てはいないのだった。どれだけ純真で正直な表現だろうか、ここに、穢れていないやがては偉大な芸術を生み出す恐るべき真実の力が隠れていると私は信じる。一株の草を描く時に幼い芸術家は鉛筆を握ってすいすいと草を描く。しかし、一気に描いたその線は、どれだけ複雑で絶妙に細やかな説明を与えてくれるか分からない。

偉大な芸術を抱いているオリニよ。どのようにして、このように自由な幸福だけを持っているのだろうか。

オリニは福である。オリニは福である。限りない福を持ったオリニを賛美すると同時に、私はオリニの国の近くにいられることをいくらでも感謝する。

(六五年五月十五日)

(以上、拙訳) (下線は筆者) (『新女性』通巻6号、京城、開闢社、1924年6月、66～71頁)

タイトルにある通り、まさに「オリニ賛美」であり、信仰告白である。天道教の信仰対象はハンウルニムであるが、子どもの姿にハンウルニムを見出している記述の部分に下線を付した。少年運動というと社会主義的な印象を受けるが、東学の農民革命も、天道教やキリスト教徒が主導した民族独立運動も、方定煥の少年運動も、本質的には抑圧された人間に内在されたハンウルニム(天)を敬い、その尊厳を賛美し解放しなくてはならないという信仰を核とした運動であったことを忘れてはならない。

7. おわりに

近代の児童文芸誌創刊、童話・童謡運動といえ、まずは当時の世界的な文芸思潮との関連から述べられて当然だろう。ましてや方定煥は1920年から23年にかけて東京で児童文化に触れている。当時日本では、『赤い鳥』や『金の船』に代表されるような児童文芸誌が花盛りで、方定煥は、特に『金の船』から世界名作童話を翻案し、『オリニ』の挿絵にも転載、引用したことがすでに検証されている³⁰⁾。

本稿で訳出した方定煥の「オリニ賛美」やその前年に発表された「新しく開拓される「童話」に関して」も、天道教のハンウルニムに子どもを重ねた信仰告白的な表現を除けば、やはり日本の1920年前後の大正自由主義、童心主義の文学論や童話研究、児童研究の影響を受けていることは明白である。小川未明、北原白秋、高木敏雄、松村武雄、蘆谷露村、秋田雨雀などの言説と比較した実証的な研究もすでになされている³¹⁾。

一方で、方定煥の伝記的研究から明らかになった天道教の信仰という朝鮮民衆の伝統的精神文化からの考察は不足しているのではないかと。韓国児童文学の出発点にある方定煥の『オリニ』創刊や世界名作童話の翻案紹介などを比較文学的観点から研究することはもちろん重要であるが、児童人権や児童文化の観点で見ると未開の荒野であった朝鮮において、開拓者として精力的に児童文化の多方面で活動した方定煥を動かした原動力は何だったのだろうか。本稿では、方定煥の「オリニ賛美」を訳出しながら、方定煥が信仰する天道教のハンウルニムを子どもの中に見出しながら「オリニ運動」を行ったことを確認した。

方定煥は1920年代朝鮮における重要雑誌である『開闢』『オリニ』『新女性』の刊行に深くかかわり、執筆し主幹した。これらは、天道教が運営する開闢社が出版する雑誌ではあるが、教団機関誌のような限定的なものでは決してなく、1920年代朝鮮を代表する総合雑誌であり、

児童雑誌であり、女性の教養と権利向上を掲げた雑誌であった。いずれも朝鮮社会を啓蒙した朝鮮近代史における重要な刊行物であるとみなされている。しかし、本稿で訳出した方定煥の文章を丁寧に読むと、やはり天道教のハンウルニム信仰、<人乃天>思想がその核心部分に存在していることに気づかされる。一般的な言葉で言うと、万人平等の思想である。こうした方定煥の思想の原点とその歴史的背景を知ること、韓国児童文学を理解するうえで大変重要である。

*本稿は、日本学術振興会科学研究費(基盤研究(C))、(課題番号:19K00535)「近代朝鮮少年運動と韓国児童文学成立期の研究」による研究成果の一部である。

参考文献

<韓国語文献> *刊行年順

- ・『開闢』開闢社(1920年6月～1926年8月、通巻72号)
- ・『어린이』開闢社(1923年3月～1934年7月、通巻122号)
- ・『新女性』開闢社(1923年9月～1934年8月、通巻71号)
- ・李在徹『韓国現代児童文学史』一志社、1978年
- ・―『韓国児童文学作家論』一志社、1983年
- ・―『世界児童文学大事典』啓蒙社、1989年
- ・―「児童雑誌『어린이』研究」、『韓国児童文学研究』啓蒙社、1983年
- ・大竹聖美「두 사람의 소파 ―巖谷小波와 方定煥―(二人の小波―巖谷小波と方定煥―)」、(韓国)韓国児童文学学会『児童文学評論』第26巻(第1号)、2001年
- ・이상금『소파 방정환의 생애―사랑의 선물』한림출판사、2005年
- ・조성운『소년운동을 민족운동으로 승화시킨 방정환』역사공간、2012年
- ・염희경『소파 방정환과 근대 아동문학』경진、

2014年

- ・민윤식『방정환 평전』스타북스소파、2014年

<日本語文献> *刊行年順

- ・李在徹「韓国児童文学の歴史と現状」、児童文学者協会『日本児童文学』1990年6月号
- ・―「1920年代の韓半島の児童書―児童雑誌を中心にして」、『子どもの本・1920年代展図録』1991年
- ・―「韓日児童文学の比較研究(1)」、大阪国際児童文学『外国人客員研究員 研究報告集1989～1990』1993年
- ・李相琴「方定煥と「オリニ」誌―「オリニ」誌刊行の背景―」、大阪国際児童文学『外国人客員研究員 研究報告集1995～1996』1997年
- ・―「日本と韓国にける児童文化の橋～韓国オリニ文化をとおして考える～」、大阪国際児童文学『外国人客員研究員 研究報告集1995～1996』1997年
- ・前島志保「児童観史観の中の方定煥」東大比較文学・文化研究会『比較文学・文化論集』1996年
- ・仲村修『韓国・朝鮮児童文学評論集』明石書店、1997年
- ・李姪炫『方定煥の児童文学における翻訳童話をめぐって―「オリニ」誌と「サランエソムル(愛の贈り物)」を中心に』大阪大学大学院言語文化研究科修士論文、2004年
- ・黄善英「交錯する童心―方定煥と同時代日本文学における「子ども」―」、東大比較文学会編『比較文学研究』88、2006年
- ・―『「童心」の思想と詩法―日韓近代の童謡運動』東京大学大学院博士学位請求論文、2007年
- ・金永順『植民地時代の日韓児童文学交流史研究―朝鮮総督府機関紙「毎日申報」子ども欄を中心に―』梅花女子大学大学院博士学位請求論文、2006年
- ・李姪炫「方定煥の翻訳童話研究―『サランエソムル(사랑의 선물)』を中心に』大阪大学大学院言語文化研究科博士論文、2008年

- ・「巖谷小波の「お伽噺」から方定煥の「近代童話」へ—方定煥の翻訳童話「妖術王アア」の比較考察」、梅花女子大学大学院児童文学会『梅花児童文学』18、2010-2011年
- ・大竹聖美『植民地朝鮮と児童文化』社会評論社、2008年
- ・金成妍『越境する文学—朝鮮児童文学の生成と日本児童文学者による口演童話活動—』花書院、2010年
- ・金志映「方定煥と翻案童話「王子と燕」、日本比較文学会『比較文学』54、2011年
- ・大竹聖美「方定煥研究～誕生から10歳まで・幼少期の生家と時代背景：評伝『小波・方定煥の生涯—愛の贈り物』を読む～」、東京純心女子大学『紀要』第18号、2014年
- ・「方定煥と天道教—孫秉熙の三女との結婚まで～評伝『小波・方定煥の生涯—愛の贈り物』を読む～」東京純心女子大学『紀要』第19号、2015年
- ・「1919年前後の方定煥—<小波(ソバ)>の由来と3・1独立運動」東京純心大学『紀要』現代文化学部、第20号、2016年
- ・「韓国近代児童文学創成期における愛—方定煥の児童文学における愛」、東京純心大学キリスト教文化研究センター紀要『カトリック文化』第10号、2017年
- ・「新文化運動と方定煥—李相琴『小波・方定煥の生涯—愛の贈り物』に見る天道教青年会発足と『開闢』創刊」東京純心大学『紀要』現代文化学部、第21号、2017年
- ・「方定煥の東京留学—李相琴『小波・方定煥の生涯—愛の贈り物』を読む」東京純心大学『紀要』現代文化学部、第22号、2018年
- ・「近代朝鮮における<童話>の形成過程—方定煥が翻案したイソップ寓話「ソウルねずみと田舎ねずみ」と創作童話「田舎ねずみのソウル見物」の考察—」東京純心大学『紀要』現代文化学部、第24号、2020年
- ・「韓国児童文学成立期の探究と1921年前後の方定煥の足跡—伝記的考察と史跡踏査を

中心に」東京純心大学『紀要』現代文化学部、第25号、2021年3月

ⁱ 이상금『소과 방정환의 생애—사랑의 선물』seoul: 한림출판사, 2005, 334頁

ⁱⁱ 李姪炫『方定煥の児童文学における翻訳童話をめぐって—「オリニ」誌と「サランエソムル(愛の贈り物)」を中心に』大阪大学大学院言語文化研究科修士論文、2004年

—『方定煥の翻訳童話研究—『サランエソムル(사랑의 선물)』を中心に』大阪大学大学院言語文化研究科博士論文、2008年

ⁱⁱⁱ 方定煥の筆名として、次のようなものが知られている。소과(小波), 은파리(銀蠅), SP생(SP生), 몽견초(夢見草), 쌍S(サンS), 파영(波影), 목성(木星), SS생(SS生), CWP, 삼산인, 스오생(シオッヒウッ生), 성서인(聖書人), 진물(真水), 몽중인(夢中人), 스오생(チウッヒウッ生), 운정(雲庭), 길동무(道連れ), 북극성(北極星), 깔깔박사(けらけら博士)

^{iv} 社団法人方定煥研究所(大韓民国安養市)、所長・張貞姫博士による教示

^v 李定鎬(1906～1938年)。イ・ジョンホ／이정호

^{vi} 金起田(1894～1948年)と同一人物。のちに漣の字を田に変更して使っているがハングルでは김기전(キム・キジョン)で同一。이상금『소과 방정환의 생애—사랑의 선물』seoul: 한림출판사, 2005, 109頁

^{vii} 小野良平『公園の誕生』吉川弘文館、2003年

^{viii} 主な研究は以下の通り。

・李姪炫『方定煥の児童文学における翻訳童話をめぐって—「オリニ」誌と「サランエソムル(愛の贈り物)」を中心に』大阪大学大学院言語文化研究科修士論文、2004年

・黄善英「交錯する童心—方定煥と同時代日本文学における「子ども」—」東大比較文

学会編『比較文学研究』88、2006年

・李姪炫「方定煥の翻訳童話研究—『サランエソムル(사랑의 선물)』を中心に」大阪大学大学院言語文化研究科博士論文、2008年

・「巖谷小波の「お伽噺」から方定煥の「近代童話」へ—方定煥の翻訳童話「妖術王アア」の比較考察」、梅花女子大学大学院児童文学会『梅花児童文学』18、2010-2011年

・金成妍『越境する文学—朝鮮児童文学の生成と日本児童文学者による口演童話活動—』花書院、2010年

・金志映「方定煥と翻案童話「王子と燕」、日本比較文学会『比較文学』54、2011年

・김영순「어린이지와 일본 아동문예잡지에 표상된 동심 이미지 고찰」, 한국문학연구학회『현대문학의 연구』62호, 2017. 6. 30

・朴鍾振, 張晟喜[翻訳]「方定煥の翻訳作品研究：〈耳の聞こえない家鴨〉と〈プルノリ〉を中心に」法政大学国際日本学研究所『国際日本学』16巻、2019年3月29日、35～59頁

^{ix} 主な研究は以下の通り

・前島志保「児童観史観の中の方定煥」東大比較文学・文化研究会『比較文学・文化論集』1996年

・이상금『소과 방정환의 생애—사랑의 선물』seoul: 한림출판사, 2005

・大竹聖美「韓国近代児童文学創成期における愛：方定煥の児童文学における愛」東京純心女子大学キリスト教文化研究センター『カトリック文化』10号、2017年1月

・大竹聖美「近代朝鮮における<童話>の形成過程：方定煥が翻案したイソップ寓話「ソウルねずみと田舎ねずみ」と創作童話「田舎ねずみのソウル見物」の考察」東京純心大学『紀要』現代文化学部、第24号、2020年3月

